

エッセイ「特撮女子」に思う

～「推し」がいる生活は、社会に受け入れられるのか？～

池田太臣

(甲南女子大学人間科学部文化社会学科)

今号で『女子学研究』が10号を迎える。第1号から関わっている者として、きわめて感慨深い。その第1号の「まえがき」で私自身が述べているが、本研究会が「女子」という言葉に注目した理由には、主に2つの社会的な動きがあった。

ひとつは、あまり注目されることのなかった“女子的領域”への注目である。女性のホモソーシャルな関係への注目といいかえてもよいだろう。「女子会」「女子旅」などがこれにあたる。もうひとつは、それまで「男性的」として扱われてきた(あるいは、そう思われてきた)趣味領域に、女性が「参入してくる」という現象が、目立つようになってきたことである。さまざまな事情のもとで、女性が不可視化されてきた領域あるいは排除されてきた領域に、女性が現れてきたのである。たとえば、「(アニメ)オタク女子」や「鉄子」、「カメラ女子」などがその例である。最近では「筋肉女子」¹や「ワークマン女子」²という言葉も生まれた。これらの2つの現象への関心が発端となり、「女子」という言葉で語られる現象に注目してきたのがこの研究会だった。

この後者の動きのひとつとして、新しいところでは「特撮女子」がある。ファッション雑誌『Oggi』の2020年2月号では、「オタ活も防寒重視で！1月の1か月コーディネート」と題された記事が掲載されている³。この記事の冒頭には、以下のような説明がある。

「好きな人(推し)がいる人生は、最高♡」

——そんな“何かに熱狂的にハマる”働く女性がますます増えていますね。

今月の1か月コーディネートは、中でも話題の「特撮女子」が主人公。

1年でいちばん寒くなっていく時期、あったかくアクティブに過ごしたい毎日に必要なアイテムは、すべての働く女性に共通です。

この説明を読むと、寒い時期にアクティブに過ごす女性に向けてのコーディネートの紹介であることが分かる。その紹介のために、「特撮女子」をあしらえるところが、なんともユニークである。企画の最後には、『仮面ライダーゼロワン』⁴の主人公、飛電或人(ひでん・あると)役の高橋文哉のインタビュー記事がある。その中で、高橋は『仮面ライダーゼロワン』は、新しい時代の新しい世界観が魅力。今までを知らなくても仮面ライダーを好きになってもらえるパワフルな作品です。Oggiの読者さんをはじめ、大人の女性にも十分に楽しんでいただける内容ですので、観てくださる方がもっともっと増えたらうれしいです」と呼びかける。

『Oggi』は、「30歳からの働く女性に向けて、シンプルでセンスのよいベーシックなファッションを提案する

1 “細くて華奢なモデル体型”でもなく、グラマラスな“ナイスバティ”でもない。「鍛え上げた身体」を目指す女性たちのことである。(米澤泉、2019、『筋肉女子 なぜ私たちは筋トレに魅せられるのか』(Kindle版) 秀和システム)

2 作業服販売大手「ワークマン」の商品をカジュアルに着こなす女性たちのこと。

3 『Oggi』(小学館)2020年2月号 pp.132-43.

4 2019年9月1日からテレビ朝日系列で放送中の仮面ライダーシリーズの最新作。AIを搭載した人型ロボット「ヒューマギア」が普及した社会が舞台。主人公は、ヒューマギアを開発・製造・販売を行う企業の若き二代目社長である。

月刊誌」である⁵。そうした雑誌の紙面上で、『仮面ライダー』の主人公の役者が、「大人」の「女性」に向けて番組の宣伝をしている。こうした状況はとても興味深い。

『仮面ライダー』といえば、「子ども」向け、そして「男性向け」というイメージがある。そのため、想像するに、「特撮女子」は、2つの意味でネガティブにみられる可能性がある。まず、“いい大人が子ども番組にハマっている”という見方である。これは、男性でも起こりうる。そしてもう一つは、“女性がハマるのはおかしい”という見方である。先の『Oggi』の特集は、この2つの否定的な見方に対して、真っ向から異論を唱えるものとなっている。

とはいうものの、それはこちらの勝手な読みなのかもしれない。この『Oggi』の記事では、「女性だけど！」というような気負いもなければ、「女性なのに」というような負い目も感じられない。雑誌の記事なので当然なのかもしれないが、今時「大人の女性が特撮にはまること」に何か特別な説明も理由も必要ないのだろう。

こうした記事が掲載される背景には、2019年1月から3月にかけてNHK総合で放送されたドラマ『トクサツガガガ』の人氣があったと推測される。このドラマは、マンガ雑誌『ビッグコミックスピリッツ』（小学館）に、2014年から連載されている、丹羽庭によるマンガ作品を原作としている。ドラマの内容は、特撮の隠れオタクである主人公・仲村叶（ドラマでは、小芝風花が演じている）が、日常生活で直面する様々な困難に対して前向きに立ち向かっていく姿を描いたコメディタッチのドラマである⁶。

もうひとつ、オタクたち自身が「推し活」にポジティブになってきたことも挙げられる。ライターの南明歩は、あるウェブ記事において、「最近アイドルやアーティストのファンをメインにしたコンテンツのヒットが目立つ」と指摘する⁷。南は、アニメ『推しが武道館いってくれたら死ぬ』（2020年1月より、TBSほかで放送中。原作は平尾アウリによるマンガ作品（『月刊COMICリュウ』徳間書店で連載中））や“アイドルオタクあるある動画”をTwitterにアップして人氣を博している末吉9太郎などを紹介しつつ、ファンのコンテンツ化が進む理由について、以下のように説明している。

これまでのアイドルオタクというのは、「推しが好きだ」という自分の内なる感情と向き合い、推しに金を積む。そんな存在だった。しかし今は、開放的に“推し活”を楽しみ、オタクであることそのものを自己肯定できる人が増えた。それゆえ、自分たちオタクを主役としたコンテンツも、ポジティブに楽しめる人の数が増えたのではないだろうか。⁸

南のいうように、“推し活”そのものを開放的に楽しむことができるようになった。このことは、ある程度事実だろう。「特撮女子」を主人公に記事をつくらることができるのも、そういう風潮に後押しされてのことかもしれない。他方で『トクサツガガガ』のような作品が共感を呼ぶこと自体が、オタクであることを「隠さざるをえない本質と問題は今も昔もかわってない」ことの証ともいえる⁹。果たして“推しのいる生活”は、今後、社会に受け入れられていくのか？ そこにマスメディア上の表現はどのようにかかわっているのか。そうした関心で研究を進めていきたいと考えている。

⁵ 小学館の雑誌紹介のウェブページより。

<https://www.shogakukan.co.jp/magazines/series/049000>, 最終アクセス 2020.3.18

⁶ 「みどころ」、『ドラマ10 トクサツガガガ』、<https://www.nhk.or.jp/nagoya/gagaga/midokoro/>, 2020.3.22

⁷ 南明歩、2020.02.16, 「推し武道、末吉9太郎……ファンのコンテンツ化はなぜ進む？ “推し活”を開放的に楽しむ時代へ」（1ページ目）、『Real Sound』、<https://realsound.jp/2020/02/post-505056.html>, 最終アクセス 2020.3.22

⁸ 南明歩、2020.02.16, 「推し武道、末吉9太郎……ファンのコンテンツ化はなぜ進む？ “推し活”を開放的に楽しむ時代へ」（2ページ目）、『Real Sound』、https://realsound.jp/2020/02/post-505056_2.html, 最終アクセス 2020.3.22

⁹ 丹羽庭、「あとがき」『トクサツガガガ』第2巻（小学館、2015）